

ジュニアキャンパス——京都大学の例

鈴木 晶子 ● 京都大学大学院教育学研究科教授・ジュニアキャンパス実施検討会委員長

一 はじめに

京都大学では、毎年、中学生を対象とした体験型の授業を二日間にわたって提供する「ジュニアキャンパス」を実施している。

二〇〇四年、「中学生を対象に、実際に研究の現場に足を運んでもらうことを通して、研究のおもしろさを体験してもらう」、大学の地域連携事業を実施してはどうか」という、当時の尾池和夫総長の発案のもと、実施が検討され、翌二〇〇五年九月に第一回のジュニアキャンパスが開催された。当初の募集定員は中学生と保護者合わせて二〇〇名であったが、二〇〇六年度の第二回からは、中学生二〇〇名程度、保護者などを含め約三〇〇名程度とした。第二回以降は、一日目午

後、二日目午前、午後の三つの時間帯で開講されるゼミのうち、一つないし二つのみ受講という形も可としたため、募集定員を増やした。

応募者の数はその後も増加してきている状況で、二〇一二年からは中学生約二五〇名、保護者などを含め約四〇〇名にさらに増やしている。今年度二〇一三年の応募者数は中学生四四九名、保護者一八一名の計六三〇名で、抽選により、そのうち中学生四〇四名、保護者一七〇名の計五七四名を受け入れた。

本事業は京都市と京都大学の包括協定に基づき、企画の当初から京都市教育委員会とは密接に連携・協力を行ってきた。京都市内に住む中学生はもとより、京都、大阪、滋賀、奈良など近畿圏、さらに北海道、福島県、香川県、広島県、福岡県など全国から参加者が集まっている。



二 基本理念

国立大学の法人化を迎える二〇〇四年、大学の中身を詳しく、正確に、迅速に、社会に見せる努力をさらに進めるために、また、市民にわかる言葉で紹介し、市民に理解してもらうことで初めて研究成果が生きてくるという認識のもとに、大学開放や社会貢献の取り組みが強化された。もちろん、大学の中を見せる窓をどのように開けていくかという考えは突然出たものではない。こうした取り組みは、以前から各部署において独自に取り組まれていた。受験生を対象とした「オープンキャンパス」、宇治地区の一二部局が運営する「宇治地区キャンパス公開」はすでに行われていた。大学の窓の多様化という構想は、法人化後さらに進められ、「オープンコースウェア（OCW）」などインターネットを活用した発信も行っている。

こうした流れの一つとして、大学で行われているさまざまな教育研究活動の一端を、中学生に伝える場として、ジュニアキャンパスが企画された。「中学生を対象として、実際の研究の現場に足を運んでもらうことを通して、研究のおもしろさを体験してもらおう」という趣旨に基づき、大学の地域連携事業として企画・実施されたのが「ジュニアキャンパス」

である。その後、本事業は、二〇〇八年に就任した松本紘総長に引き継がれた。松本現総長は、生存圏研究所所長時代に自ら中学生向けのゼミ「宇宙科学と宇宙太陽発電所——人類の生存圏フロンティア『宇宙』へ飛び出そう」を開講したほか、総長として、二〇〇九年には特別講義「宇宙へ飛び立つ——観る、翔る、使う」を行っている。

受験勉強の段階に入る以前の段階にある中学生に、学問のおもしろさや魅力を、京都大学の研究室や実験室など現場の空気に直接触れることを通して中学生に知ってもらうことの意義を重視し、現在に至っている。

三 企画運営

企画に際しては、実施検討会の委員による熱心な議論が戦わされた。京都大学が中学生に対して何を提示していくべきなのか、何を伝えることができるのか、募集人員は？ 募集の方法は？ 授業の形態は？ など、実施の理念はもとより、その具体的な手続きから実施内容まで、さまざまな観点から検討した。

さらに、中学校の置かれた状況や中学生の学習意欲など学校現場の実態を把握するため、京都市の中学校で教鞭を執る教員の方々に意見聴取を行った。

Kyoto University Junior Campus 2013

京都大学 ジュニア キャンパス 2013

ひらけ！
好奇心の玉手箱

日時 2013(平成25)年
9/14 (土)
15 (日)

会場 京都大学吉田キャンパス、宇治キャンパス、
桂キャンパス 他
(各講義室/実験室/実習室/研究室)

プログラム 特別講義、中学生向けゼミ、若手研究者特別ゼミ、
大学院生等によるポスターセッション、特別招待ゼミ

参加資格 京都市及びその近郊の中学生
(その保護者や教師等も参加できます。)

参加費 中学生：3,000円 保護者等：3,000円
※全プログラムの参加でも一部のみの参加でも可能です。

募集定数 中学生約 250名、保護者等を含め約 400名

申込方法 参加申込方法については、京都大学ジュニアキャンパス 2013 ホームページ
をご覧ください
申込締切 2013年 8月 9日 (金)

主催 京都大学 (共催) 京都府教育委員会

京都大学学務部教務企画課ジュニアキャンパス担当
TEL 075-753-2548
※詳細はホームページにも掲載しています。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/open/junior.htm>

- その中から、
- (1) 中学生各自の自発性を最大限生かして授業を選択できるような参加形態をとること
 - (2) 小人数制で大学教員や大学院生との交流の密度を高める授業形態にすること

を吹き飛ばすかのように、「われこそは」と名乗りを上げてくる教員は多く、平均して三〇余りのゼミを二日間の開催期間中に提供している。

受講者募集は、京都市教育委員会を通じてパンフレットを京都市立の学校に配布したほか、本学のウェブページに掲載

- (3) 京都大学の最先端の研究をわかりやすく伝える場にあること
 - (4) 闊達な議論の場づくりを工夫することで、自分の考えを育てるといって京都大学の学風を体験してもらえ、授業環境を実現すること
- などいくつかの骨子がまとまった。しかし、骨子はできても、魅力的な授業のメニューをとりそろえるには、中学生に授業をしてみようという関心と意欲を備えた講師陣を確保しなくてはならない。研究や教育など多くの仕事を抱えた大学教員がどれだけ本事業に関心をもってくれるかは未知数だった。だが、学内に講師の募集をしたところ、そんな懸念



し、中学生からの応募を受け付けた。その際、あくまで中学生一人ひとりの参加意思を尊重するという観点のもと、学校単位あるいは学級単位での応募には応じないという方針をずっと守ってきている。一つのゼミに同じ学校あるいは学級の生徒が参加することにならないよう配慮もしている。また、ゼミ受講はなるべく参加者の希望に応ずることができるよう、第三希望まで聞いている。

四 実施結果から見てきたもの

中学生に研究者の仕事の現場を体験してもらい、また研究のおもしろさを少しでもわかってもらうことは容易なことではない。レベルを下げずにわかりやすくという、伝達の基本がいかに難しいか、また、エッセンスを伝えることは自らの研究の根底に触れるいかに

スリリングな仕事であるかなど、ジュニアキャンパスを通して、担当講師を務めた大学教員からは多くの感想が寄せられている。

参加した保護者や中学生には毎回、アンケート調査を行っている。おおむね好評を博しているが、しかし、中学生にとって魅力的な授業をわかりやすく提供するという使命はそれほど簡単なことではない。

「専門用語が多くてわかりにくかった」「九〇分のゼミの時間内に消化できる分量を配慮してほしい」「もう少し研究の詳しい内容に触れてほしかった」など、アンケート調査を通して寄せられた感想文は担当講師にフィードバックし、また携わった大学教員が一堂に会した反省会を開催するなどして、これまでの知見を蓄積するとともに、情報交換できるように配慮している。

五 成果の検証

(1) 見えてきた二ーズ
この九年間の到達点・成果として、次の五点が挙げられる。

生徒は、大学受験を念頭に理系・文系いずれに進むかという発想で学習をとらえがちである。しかし、大学での学びや研究では、環境や生命など文理融合的あるいは学際的なアプ



ローチを必要とする領域も増えてきている。ジュニアキャンパスは、普段通う学校で学ぶ教科目の枠を超えた学びの形を伝える場となっている。

また、小人数形式による実験や討論形式を踏まえた授業を通して、研究の現

受付、七月～八月に京都市教育委員会の協力を得て受講受付、九月末ごろに実施」という現行のスキームは、ゼミ提供教員の協力、予算の裏づけがあれば今後も実施することが可能である。

(3) 実施内容の充実

回を重ねるごとに、多様な方法で京都大学を知ってもらう企画・機会を増やしてきた。時計台記念館の免震装置をはじめ、学内の諸施設を案内する「キャンパスツアー」や、本学の現役の学生が中学生からの質問に答える「大学生何でも質問コーナー」、大学院生によるポスターセッション、若手研究者特別ゼミも開催した。

また、参加者は期間中に総合博物館や附属図書館を無料で見学できるようにした。

(4) 学内外における認知度向上・連携協力の実現

この九年間の実績を通じ、学内での認知度は上がっており、教員個人単位での協力だけではなく、各部署との連携協力も実現している。「部局がアウトリーチ活動を行う際の広報・募集の全学的な窓口・受け皿」という認知もされつつあり、すでにある部局から「来年度以降組織的な連携を行いたい」という声も上がってきている。

また活動の記録は写真撮影にとどまらず、本学の特色あるアウトリーチ活動の紹介としてDVDを作製し、関係部署及

場を知ってもらい、探求型学習を体験してもらうことができ。自分自身の目でものを見、考え、意見を言うという体験を通して、自由の学風と自学自習という京都大学らしさに触れる機会を少しはあるが提供することができたと考えている。

(2) 実施体制の安定

九年間の実施を通じ、安定した実施体制を構築するに至った。「年度当初に募集概要を決定、五月～六月にゼミ提供の

び科学コミュニケーション事業の関係者などに配布した。その他、OCWへアップするなど広報にも工夫してきた。新たにゼミ提供を考える大学教員や若手研究者にとっては過去の事例を知る機会となっている。

(5) 特色ある社会連携の実現

企画の当初から、京都市教育委員会とは密接に連携・協力を行ってきた。特に企画の検討に際しては、京都市教育委員会、校長会、現場の中学校教諭などさまざまな立場の方々と意見交換を行い、企画内容に生かしてきた。

なお、京都市教育委員会側にジュニアキャンパスをKBS京都の特設番組とする取り組みがあり、二〇〇七年十月十四日に放映された。

六 今後の展望

——京都大学の地域連携事業の一環として

九回の開催実績を経て、中等教育と高等教育の接続や連携の具体化など新たな教育状況も出てきている。大学の地域連携のあり方や、大学研究者によるアウトリーチ活動の展開方法など、京都大学ならではの事業形態の実現に向けては、予算、組織、運営、内容など今まで以上に多角的な観点から検討を加えていく必要がある。

(1) 科学コミュニケーションの重要性が盛んに指摘される

ようになってきている今日状況の中で、大学としての地域連携の取り組みとしては的を射た企画であると言える。

(2) ゼミを提供する教員の研究室にとっては、ボランティアであるというその原則にもかかわらず、教員自身、また大学院生たちのFDとしての効果が認められた。

(3) 理系・文系を問わずさまざまな分野での研究の最前線を、中学生や父母向けに話をするというこの試みは、京都大学の多様性を見てもらう良い機会となっている。特に、どんな専門領域があるのかについての情報を提供する場ともなっている。

(4) 大学のアウトリーチ活動あるいは科学コミュニケーション活動は、中等教育機関における教育の質向上に資することも視野に入れていく。ジュニアキャンパスでは、中学校の教員の参加も受け入れているが、なかなか現職教員の参加数は増えていない。実験や実習、討論形式での授業方法の改善、発展的学習や進路指導のための教育研究リソースのプラットフォーム構築など、中学校の現場教師に向けたきめ細かな対応の実現は今後の課題である。

ジュニアキャンパスは、高大接続のさらなる展開としての中大接続を考える契機として、「中等教育と高等教育の接続」を通じた教育の質保証の未来形を模索していく作業であると考えている。

社会人向けオープンキャンパスの実践

—城西国際大学環境社会学部の試み

鈴木 弘孝 ●城西国際大学環境社会学部長

一 城西国際大学での社会人に向けた多彩な学び

人生八〇年の長寿社会を迎えて、生涯学習の重要性への認識が高まっている。平成十八年十二月に改正された教育基本法第三条には、「生涯学習の理念」として、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」と規定されている。平均寿命が八〇歳を超えた長寿社会では、仮に六〇歳で定年退職した場合、二〇年間の余生をいかに健康で充実した豊かな時間を過ごせるかが極めて重要な課題となる。

長年にわたり今日の社会の発展に貢献してきた社会人の皆様が、「余生」として時間を過ごすのではなく、これまで蓄積してきた経験と能力を基礎として、より知的に、より創造的に、より専門的にブラッシュアップし、社会に主体的に貢献できる知識とスキルを身につけることのできる知的創造の場として大学の存在が再評価されるとともに、地域と社会に

向けて広く開放され、社会人に有効に活用されていくことが重要と考える。

城西国際大学では、社会人に向けた多彩な学びの機会を提供する仕組みがすでに用意されている。本学の「生涯教育センター」では、「コミュニティカレッジ」として年間二〇〜三〇の講座を開講するなど、市民の学ぶ機会と場を提供している。また、健康に関する基礎知識講座や実技でシニアの心身の健康を支援する「シニアウエルネス大学」の制度、さらには社会人としての実績を踏まえ、大学の学部や大学院で本格的に学習し、研究するための「社会人入学制度」などがある。

二 環境社会学部の 社会人向けオープンキャンパスの試み

本学部では、文系・理系の枠組みを超えた統合的な視点から「環境」について幅広く学ぶことで、「持続可能な社会」に貢献できるグローバル人材の育成を目指している。今日、地球規模で進行しつつある温暖化問題や生物種の減少、資源の有限性などの課題解決のためには、低炭素社会、自然共生



社会人オープンキャンパスの開催風景



社会、資源循環社会を基調とする「持続可能な社会」の実現が必要とされている。「持続可能な社会」は、何よりもまず安全が確保されることを基盤とし、現代世代が享受している環境からの恵みを将来世代も等しく享受できる社会である。その実現のためには、国と地方公共団体、企業、NPO、市民のそれぞれの役割に応じた取り組みが協働して実践されていくことが必要不可欠となる。

本学部での環境の学びと資格取得支援により、例えば「生活園芸士」の資格を生かして、緑化コーディネーターとして地域のガーデニングや緑化の普及と指導にあたる、あるいは「環境カウンセラー」の資格を生かして、地域の環境教育や環境保全活動にリーダーシップを発揮していくなどが期待できる。本学部での「環境の学び」の意義と特色、取得できる資格などをわかりやすく説明し、「体験講座」などを通

平成25年度社会人向けオープンキャンパスの概要

開催日	タイトル	内容
6/1	アロマの活用	アロマセラピーの模擬講義とアロマを使ったせっけんづくりの体験
7/20	低エネルギー社会へのシナリオ	これから目指す低エネルギー社会に向けて、3Rによる「循環型社会」のライフスタイルを考える
9/7	寄せ植えで“園芸療法”入門	植物と触れ合い、手先を使ってのリハビリ効果を引き出す「園芸療法」を多肉植物の寄せ植えで体験
11/30	木づかいでエコを实践	鉛筆の木屑を焼却せずに有効利用した「木の粘土」で作品づくり
1/25	薬草の知識と活かし方	城西国際大学所有の「薬草園」を紹介し、薬草とその効用について学ぶ
2/15	生活環境を香りで彩る	生活を豊かにし、よい環境を演出する自分好みの香りづくりの体験
3/1	3Dで描くまちづくり	パソコンを使って3D(立体的な)まちづくりに挑戦

じて、参加いただいた社会人の方々にご理解をいただく場として、平成二十四年度より「社会人向けのオープンキャンパス」を、一般の高校生向けオープンキャンパスとは別に実施している。このオープンキャンパスを通じて、本学の多彩な社会人向けの学習メニューの中でも、特に社会人入学を奨励することを重視し、参加した社会人の学習意欲に応じた学部教員との面談などによるきめ細かな対応を行っている。本年度実施している社会人向けオープンキャンパスの概要は表のとおりである。

今後とも、生涯教育の受け皿としての大学機関の重要性を踏まえ、地域との連携を密に図りながら、社会人オープンキャンパスを継続させることにより、社会人の皆様が環境を学ぶことの意義と資格取得をはじめとする学びの成果の有効な活用方法などについて、効果的に発信力を高めていきたい。

学生と共に運営するオープンキャンパス

西田 昌司 ● 神戸女学院大学人間科学部教授・入試部長

高校生・受験生に大学を体験してもらおう一つの方法として、本学でもオープンキャンパスを開催している。二〇一三年度は六月、八月、九月、十一月、十二月、翌年三月の計六回開催するが、中でも八月は開催規模が最も大きく、本学にとつては最大の入試イベントとなっている。

オープンキャンパスでの開催プログラムとしては、開催月によって多少変化するが、教員による模擬講義、学生スタッフによるキャンパスツアー、学生スタッフとのフリートーク、職員との入試相談や就職・留学相談、ガイダンス形式での大規模な説明が中心となる。内容そのものに大きな特色があるわけではないが、少人数教育を実践している本学では、普段から「一人ひとりとしつくり向き合うこと」を大切にしておき、そのことをオープンキャンパスへの来学者の皆さんにも体感していただきたいと思っている。そのため、例えば学生とのフリートークコーナーではゆっくりと話していただけるよう、学生スタッフを多めに配置したり、あるいはキャンパスツアーでは学生による説明がきちんと届くよう、基本的には五〜一〇人前後の少ないグループで案内するようにし

ている。

このように一人ひとりの来学者としつくり向き合える空間をつくることは、本学がオープンキャンパスで大事にしているポイントの一つである。

二つめのポイントは、これがある意味一番大きな特徴と言えるかもしれないが、オープンキャンパス運営の中心的役割を担ってくれる学生スタッフの存在である。毎年、一〇〇人を超える学生スタッフが参加してくれるが、今やこの学生スタッフの活躍なくして、本学のオープンキャンパス開催はあり得ない。高校生・受験生に学生スタッフの生き生きとした表情を見てもらうことで、大学生になった未来の自分の姿をイメージしてもらいたいというのが、われわれの思いである。

実際、神戸女学院大学に入学してくる新入生の多くが、本学への進学を決めた理由として「オープンキャンパスで出会った学生スタッフの皆さんがすてきで、私もああいう大学生になりたかったから」と答えてくれる。高校生だった彼女たちには、年齢は大して変わらない学生スタッフの姿が、きらきら輝く大人の女性に見えたのであろう。



神戸女学院には、「お嬢様学校」というイメージが根強くあるようである。しかし実際には、芯が強く、自分の考えをしつかりともつたたくましい学生が多い。高校生・受験生が、本学に来て学生スタッフにあこがれの気持ちをもつてくれるのは、学生の生き生きとした表情の中にもそういった芯の強さを感じてくれるからではないだろうか。

ちなみにこの学生スタッフだが、ありがたいことに、一〇〇人程度の定員に対して毎年三〇〇人を超える応募があるため、書類選考と面接を経て採用している。とりわけ「私も学生スタッフのようにになりたい」と入学を決めてくれた新入生からの応募が最も多いのだが、高学年になってから初めて応募する学生も意外に多い。彼女たちの中には「入学理由は、正直に言って第一志望に落ちたからという消極的な理由だったけれど、今は神戸女学院が誰よりも大好きになったので、この大学の良さを少しでも高校生・受験生に知ってほしい」と話してくれる学生もいる。われわれ教職員にとっては、何よりもうれしいことである。

また本学では、日程の都合でオープンキャンパスに来られない方のために、「受験生ルーム」を開室している。こちらはオープンキャンパスと違ってこぢんまりとした規模になるが、学生スタッフ二、三人と入学センタースタッフが常時スタンバイしており、高校生・受験生のために用意した部屋の中でじっくりと個別相談できるのが特徴である。もちろん、学生スタッフによるキャンパスツアーも実施している。

この受験生ルームは、入試日など一部を除いて、基本的に毎年七月から十二月までと翌年三月の土曜日に開室しており、八月は本学の盛夏休業を除いて平日もほぼ毎日開室している。本学の入試情報サイトでは、受験生ルームの開室日ごとの学科の何年生がスタンバイしているかを紹介することにしている。そうすることで、希望する学科の学生がいるときに確実に相談に来ていただくことができるからである。

中には、オープンキャンパスは人が多いからと、あえて受験生ルームを利用する方もいらっしやる。そのため多くの来室者が、一時間以上にわたって学生たちとさまざまな話をしておられるようである。

このように、本学が大切にしている「一人ひとりとじっくり向き合うこと」を、オープンキャンパスだけでなく、受験生ルームにおいても心がけている。

オープンキャンパスを含め、高校生・受験生対象のイベントは、ともすれば大学の良い部分を見てもらいいたために、その日に向かってひたすら準備を進めがちである。もちろん、多くの方に来ていただくイベントであるため、来場者の視点に立ち、安全確保を含めた準備・調整を進めることは言うまでもない。しかし本学では、それを過度に意識することなく、学生たちのありのままの姿を見てもらえる最大のチャンスと考えている。

そしてそのことが、神戸女学院大学をより深く知っていたくために最も大切なことであると思っている。

高校生を志願者に変えるSNS活用事例

江藤 知治 ● 株進研アド事業開発室室長

一 はじめに

オープンキャンパスに保護者やご家族、また、受験生だけではなく、高校一年生や二年生が参加するのは、もはや普通のこととなっている。ただ、多様化する来場者に対応することでターゲットがあいまいになり、どの参加者からも満足を得られなくなった大学も多いというかがう。最近では、その反省から実施回数を増やし、回ごとにターゲットを絞り、目的を明確にすることで効果を上げていくということを考えられているようである。高校の教員のみ、保護者のみを対象にするものも実施されているのがついている。

二 オープンキャンパスの目的は変化しているのだろうか

今も昔も変わらないことと思うが、高校生が志望する大学

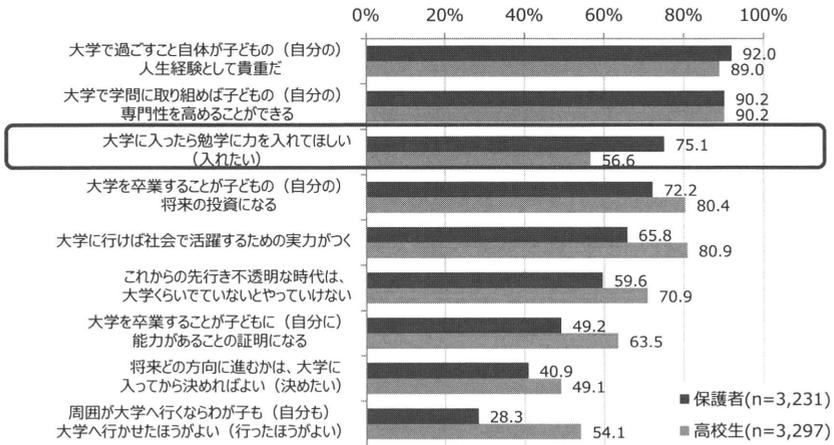
に実際に足を運び、大学に対する理解を深め、自分の行くべき大学かを判断することが目的ということに違いはないだろう。では、保護者にとってはどうか。ベネッセ教育研究開発センター（現・ベネッセ教育総合研究所）が実施した「高校生と保護者の学習・進路に関する意識調査」によると、「インターネットなどを使って、「大学の情報を集める」「大学の入試方式を調べる」という項目が五〇%を超えて高い。また、「子どもと一緒に学校の見学に行く」が四〇・九%に及んでいることもわかる。そんな保護者は、「子どもと一緒に学校の見学に行つて」何を見ているのだろうか。

考えるヒントとなりそうなのが、**図1**の保護者と高校生の進学意識のギャップである。目を引くのが「大学に入ったら勉学に力を入れてほしい（入れたい）」という項目である。

これらのデータについて大学関係者と議論をしたが、結論としては、「保護者が、オープンキャンパスで見ているのは、大学の教育結果としての在学生ではないか」ということだっ



図1 高校生と保護者の意識ギャップ



■大学進学に対する意識

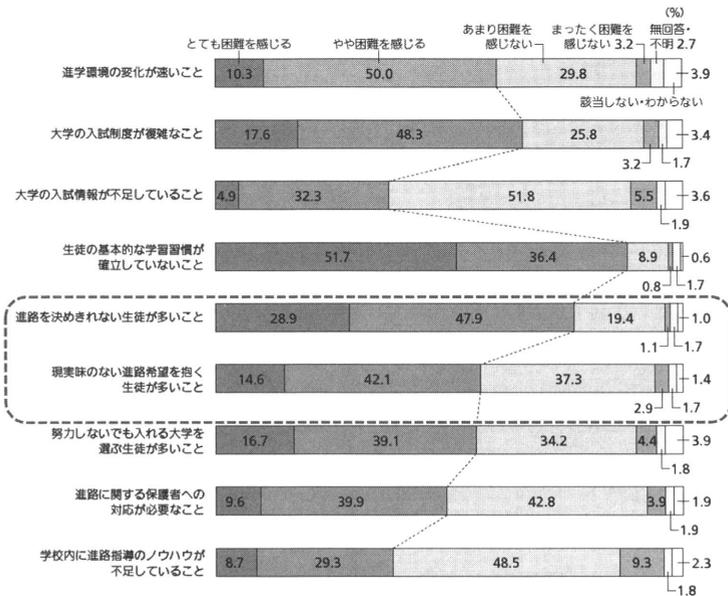
※全学部系統対象

※「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%

出典:ベネッセ教育総合研究所「高校生と保護者の学習・進路に関する意識調査」2011

© Benesse Corporation, All Rights Reserved

図2 高校教員が進路指導で困難を感じること



※対象は国語・地理歴史・公民・数学・理科・外国語のいずれかを担当している高校教員3,070人。

出典:ベネッセ教育総合研究所「学習指導基本調査(高校版)」2010

© Benesse Corporation, All Rights Reserved

た。「自分の息子や娘がこの大学に入ったらどうなるのか」ということを、在学生の対応を見て確認しているということだろう。

また、**図2**を見てほしい。これは、高校教員が進路指導にあたって困難を感じていることを調査したデータである。困難の一位は「基本的な学習習慣が確立していない」ということだ。これはこれで入学前までに対策したい大きな課題ではあるが、ここでは、二位と三位の項目に注目したい。「進路を決めきれない」「現実味のない進路希望をもつ」という困難である。高校教員は、これらの進路に対するあいまいな意識を明確にするための一つの方法として、大学のオープンキャンパスに参加することを勧めているようでもある。

まとめると、「この大学に入ると、自分の子どもはどんな大学生になるのだろうか」「自分の教え子はどんな大学生になるのだろうか」「自分がこの大学に入学したらどうなるのだろうか」ということを見つけに来ているということではないだろうか。

確かに、大学の設備も重要だし、おいしい学食も重要ではある。大学のシラバスも入学試験科目も欠かせないことだろう。しかし、入学した学生のアンケートの中に、「オープンキャンパスで出会った先輩のようになりたかったから」とか、「オープンキャンパススタッフの対応が親切だったので」と

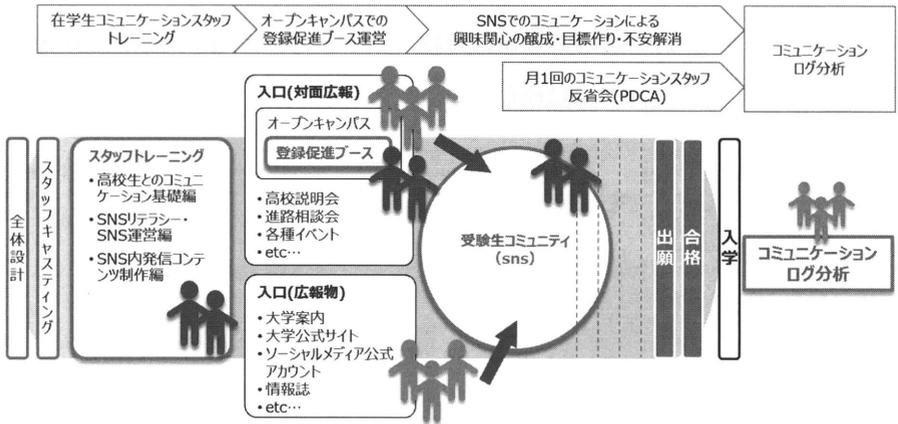
いう声を見受けることがあるのではないだろうか。そんな学生の声からも、オープンキャンパスの観点は「将来の自分の姿」を探しに来ているとも言えるだろう。

三 オープンキャンパスを一過性のイベントから 高校生と在学生が継続的に 対話をするキッカケにできないか

オープンキャンパス当日に工夫を凝らすのはもちろん重要なことではあるが、出願、受験、入学という意思決定のプロセスを踏んでいく期間は長期にわたる。そして、この期間の中で、高校生は保護者や高校教員と対話し、意識やニーズを変えていくのである。この重要な意思決定期間に、大学が何らかの支援をすることができないだろうか。そんな問題意識をもたれている大学と議論を繰り返した。

少子化対策という側面もあるが、せっかく大学まで足を運んでくれた高校生である。ぜひ、何らかの形で出願、そして入学まで支援したいという熱心さと思えた。ある大学からうかがった理由は明確であった。まず第一には、オープンキャンパスに一回参加する高校生より、複数回参加した高校生のほうが出願率が高いということである。また、複数回参加して大学のことをよく知ったうえで出願・入学する進学者はミスマッチが少ないということだ。

図3 SNSを活用する育成型対面広報の全体像



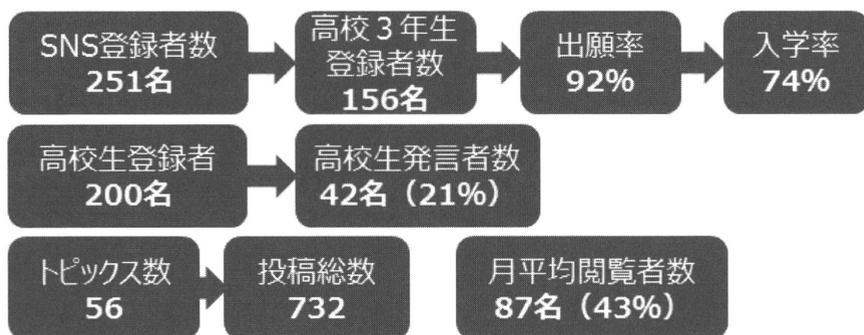
四 オープンキャンパスの位置づけと その後の支援を見直す時期では

これまでの資料や関係者との議論の結果を踏まえると、オープンキャンパスに対して、高校生、保護者、高校教員のそれぞれの思惑が違う。ただし、自分、子ども、教え子のいずれも「将来の姿」を探すという姿勢は共通している。特に、当事者である高校生にとっては、在学生と出会う意味は大きい。そして、その出会いから在学生と継続的に対話を行い、複数回のオープンキャンパスに参加し、将来の自分を見つけ、納得して進学するというプロセスを準備することはさらに重要といえることができる。

私たちは、これらの要件をまとめて「育成型対面広報」という言葉に集約した。高校生を確信と希望に満ちた出願・入学へとつなぐために、高校生と在学生が対面できる場を提供する。この場がオープンキャンパスである。対面コミュニケーションで、高校生は自分の意志で進学意識をもつこととなる。一方の在学生も、高校生の質問に答えることで自己成長することを目指している。

このような対話による相互成長を継続し、効果を上げる場として、SNSを活用するのである。図3ではその仕組みを紹介しておく。

図4 育成型対面広報の実績データ



五 育成型対面広報のエビデンス 「九二%出願」「七四%入学」

図4は、SNSを活用する取り組みを実施した大学事例の結果である。高校三年生の登録者の、九二%が出願、七四%が入学という結果だった。この結果については、「もともと志望度の高い高校生のみが登録していたのでは……」との声も聞かれるが、登録は、来場した高校生に対して在学生スタッフが無作為に声をかけ、登録ブースへと導いた。その中には友達の付き添いで来た高校生もいた。そのような高校生も含め、登録ブースへ導いた高校生はほぼ全員が登録をしたことは確認できている。必ずしも志望度が高い高校生のみの登録であったわけではないと考えられる。

SNS上では、さまざまな対話がなされた。炎上が懸念される投稿も見られた。その場合も、対応する在学生へ事前に対処方法やその考え方を研修することで、通常の対話に戻った事例も確認された。

SNS上の対話分析も進め、関係者と議論した。

最も重要な問いは以下の三つと考えられる。

- (1) 先輩は、なぜ、この大学・学部を選択したのですか？
- (2) 先輩は、今、勉強がおもしろいですか。大学生活に満足していますか？

(3) 先輩は、これからの勉強や就職をどうされるつもりですか？

これらの質問は、在学生にとっても高校生にとっても大変有意義な問いだった。

高校生にとって、在学生の等身大の答えは、進学意識を高めていくことに役立つことは言うまでもない。在学生にとっては、あらためて「今までの自分を振り返る」問いである。不思議だが、これらの問いを教職員から投げかけても、しっかりした答えを返してくることは少ないようだ。しかし、高校生からの問いとなると、一生懸命に考え答えようとする。

在学生にも意識と行動の変化が見られたのである。このような在学生の姿は、保護者や高校教員にとっても大学選択・推薦の重要な要素になるのではないだろうか。

そして実は、これらの質問は採用担当者が就職希望者に投げかける問いと共通する点がある。

(1) あなたはこれまで何をしてきましたか？ それはなぜですか？

(2) その結果を振り返って気づくことはありますか？

(3) そして、当社に入社して何をしたいですか？

高校生と真摯に対峙することで自己を振り返り、人に伝えるために言葉にしようとする意識と行動は、在学生のキャリア意識の育成に生かせるとも言えるだろう。

六 高校生を志願者に変える

継続的なコミュニケーションツールとしてのSNS

オープンキャンパスは誰のものかという点と、これは当たり前すぎる答えになってしまうが、大学を知るために来場する高校生や保護者、そして、高校教員のものであり、大学のものだろう。

大学の教育結果としての在学生の姿を見せることで、「その大学に入学したらどうなるのか」という答えを提示することができる。そのことで、大学入学におけるミスマッチを減らすこともできる。

しかし、多様な人々がさまざまな思いで参加することが普通になった今、オープンキャンパス当日のあり方は当然として、重要なのは、その後の継続的なコミュニケーションではないだろうか。受験プロセスの課題を高校生と在学生が対話することで高校生を志願者に変えるのである。大学から見ると、オープンキャンパスから出願、受験、そして入学までの長期間、移り変わる高校生のニーズにつねに対応していく有効なツールを加えることになる。そして、この仕組みの中で培われる在学生の力の蓄積が、大学の入試広報の資産になり得ることは言うまでもないだろう。